

第3章 朝鮮総督府の社会教化映画製作と上映

1. 映画機能の拡大

朝鮮総督府官房文書課所属の「活動写真班」はその主管機構である朝鮮情報委員会の解体と共に、1924年（大正13）11月社会課に移管された。その後従来の朝鮮紹介と総督府の施政宣伝活動を続けながら、社会教化用の映画製作及び上映活動にも本格的に乗り出すようになった。

朝鮮総督府が映画を社会教化のために利用するようになったのは日本とほぼ同時期のことで、日本政府による映画利用に影響されたためと思われる。当時日本では思想、経済、及び生活改善問題等を中心とした社会教化事業の範囲がどんどんと増えていった。それらは内務省の「民力涵養」運動を始めとして各官庁及び公益団体等を中心に汎社会的に行なわれた。

社会教化事業のためにポスター、チラシ、出版物を通じての広告、パンフレット、講演、展覧会、懸賞募集、幻燈、映画等が利用された。中でも映画は社会教化において最も適合した媒体として認められた。その理由について当時山根幹人は『社会教化と活動写真』で次のように述べている。

1. 映画は動的であるがために情熱的である。情熱には共鳴の力があり、群衆を一様に感化する力がある。その感化力により映画を効果的に社会教化に利用することができる。
2. 視覚には理解が伴うが、映画は視覚本位であり、よく理解させる素質をも持っている。
3. ネガから多数の複製をして各地で同時に上映することが可能で、野外等での公開設備が簡単なために大衆に近づきやすい¹。

日本における社会教化のための映画利用は各官庁を中心に行われた。前章で述べたように1924年（大正13）8月内務、大蔵、文部、農商務、逓信の各省が連合協議会を開き、勤儉奨励について映画を利用して国民に呼びかけようと決議したことがある²。その後日本では各官庁の依頼により社会教化のための映画が頻りに製作され、その利用が著しく増えた。

社会教化映画の主要内容は、衛生局の衛生思想鼓吹、逓信省の貯金及び簡易保険の必要性周知、鉄道省の従業員慰安、海軍省及び陸軍省の兵士募集や愛国心鼓吹、司法省の囚人保護、農商務省の副業奨励や産業奨励及び農村振興、その他の防火宣伝、砂防工事等にわたり、非常に幅広い。

このような社会教化のための映画利用は朝鮮でも総督府によって推進され、内鮮融和を始めとして、農山漁村の振興運動や、納税、衛生、教育思想の普及等多岐にわたって利用された。それで社会課の「活動写真班」では宣伝映画中心の初期よりもその活動範囲が拡大し、多様なシステムで映画利用を展開した。

この章では「活動写真班」の社会課移管後の1920年代中盤から、日中戦争が勃発して「活動写真班」の役目が皇民化のために大きく変わり始める1937年まで、朝鮮総督府が社会教化のた

めに行なった映画利用の動きについて、製作の内容、上映の仕組み、フィルム・ライブラリーの運営、推薦制に分けて述べることにしよう。

韓国映画史においては朝鮮総督府の社会教化映画に関しても、前記の伊藤博文と斉藤実時代の映画利用と同様にまだ空白の状態である。従って、本論文では資料発掘の意味から統計等関連資料をできるだけ多く提示し、これからのこの分野の研究活動に役立てたい。

2. 「活動写真班」における映画利用の拡大

社会教化用の映画製作

「活動写真班」は内務局社会課へ移管後、社会教化目的の映画を本格的に製作するようになった。移管翌年の1925年（大正14）、「活動写真班」では早くも日本内務省の教化団体連合会の状況、朝鮮畜産連合組合の家畜共進会、総督府医院の医療施設、全羅北道の畜産映画、蚕糸協会状況等、社会教化目的の映画を相当数製作した。

社会教化映画の殆どは他の官庁や公共団体の依頼で製作された³。当時社会教化に最も力を注いでいたのが農村分野であり、農村振興課や農産課の依頼で優良農村の事例紹介、水利組合による水利事業、東洋拓殖株式会社による改良農法指導の実況等の映画が製作された。『更生する農村』（年代未詳、以下表記省略）、『朝鮮の農業』（1929）、『農村指導』（1930）等の農山漁村指導更生の状況を知らせる映画や、緬羊飼育の指導映画『北鮮の羊は語る』（1934）⁴等がその例である。林政課では火田民指導の手段として咸鏡南・北道の火田民生活の状況を映画にした『咸南の火田民』（1932）等、警務課では国境警備や消防宣伝関連の『国境冬の陣』（1937）、『慶北の消防陣』（1937）等の映画を「活動写真班」に依頼して製作した。又専売局でも1933年（昭和8）から煙草耕作違反の取締に映画を利用することとなり、劇映画の『タンバクヤ』5巻（1932）を始め、『煙草の製造』、『専売十五年』等の社会教化映画が同局の依頼で製作された⁵。

「活動写真班」が制作した社会教化関連映画は教育、産業、警察、地理、風俗、社会事業、労働、農村振興等の分野にかけて幅広い。1928年（昭和3）には社会事業関係の映画として、全朝鮮における救護、救療、児童保護、特殊教育、釈放者保護、職業紹介、授産事業、福利施設、社会教化及び地方改良に関するものを10巻の映画に収め、社会事業の大要を紹介すると共に農村振興及び教化指導に臨んだこともある。

労働関係の映画としては多数の労働者を必要とする河川改修、灌漑施設、鉄道敷設、水力電気、港湾修築等のような工事現場の状況を撮影したものが多い。これを朝鮮各地の人々に観覧させ、工事についての予備知識を与えると共に、日本国内の工事現場の労役のために渡航させる⁶誘引策として使われた。

特に、朝鮮総督府では1927年（昭和2）より日本と朝鮮人相互の理解並びに労働者需給調節の方面にも特殊映画を製作利用することになった⁷。産業関係の映画としては農業、水産、林業、鉱業、工業の各部門に分けて専門的に製作された。当時製作された社会教化映画の代表的な例

は次の表の如くである。

表< 3 - 1 > 朝鮮総督府製作の社会教化映画の代表的な例

映画名	製作年	巻/米数	概要
社会事業			
社会事業大会	1928	1/108	昭和4年10月京城において開催された朝鮮社会事業の大会の光景を撮影したもの
英文 社会事業	1928	1/333	三千万円の御下賜金により経営されている社会事業中、捨子の収容育児、盲啞教育、ライ病の施療等
救護施設	1928	1/187	行路病人収容所及養老院の実情を撮影
授産事業	1928	1/117	家庭が裕福でない者に編物、機織、養蚕などを指導する実情
職業紹介	1928	1/159	京城府人事相談所の実情及び本府社会課釜山出張所において各道に労働者を斡旋する状況の実写
教化施設	1928	1/226	和光教園、京城保隣会、釜山共生園、朝鮮扶殖農園における教化事業を撮影
朝鮮の労働	1928	4/956	朝鮮内において多数の労働者を必要とする事業を取り纏めて紹介
起てよ青年	1932	4/1,040	最も優良な青年団として知事から推奨されたものを各道に跨ってその特殊性を撮影
愛国婦人会	1934	2/474	昭和9年9月京城に於て開催された第六回愛国婦人会の状況
内地の青年団	不明	1/226	優良青年団として内務大臣からも表彰された大分県大分郡植田村の青年団及び処女会を撮影
英文病院	1923	1/244	大学病院、大邱、公州、清州、春川の道立病院に於ける施療状況
大阪での生活	不明	2/500	在阪朝鮮人の生活状況を実写
自力更生			
麗しき農村	不明	2/423	忠清南道論山郡葛山里の優良農村

			が一寒村から更正する経過を説明的に撮影
郷土は輝く	1932	2/560	最も優良な勸農共済組合として知事が推奨したものを各道に跨り、その得意な点を提えて撮影
更生する農村 (慶北)	不明	4/1,050	慶尚北道に於ける農山漁村の更生状況を撮影
更生する農村 (全南)	不明	1/389	全羅南道更生農村の状況を撮影
咸南の火田民	1932	2/580	朝鮮林政の癥といわれた火田民の火入耕作其の他起居の状況を咸南恵山鎮奥で撮影
伸び行く金融組合員の村	不明	7/1,200	各道一箇所ずつ金融組合指導の優良部落を撮影
産業			
朝鮮の産業	1929	2/600	朝鮮産業の歌を映画化
英文 栄ある農村	1930	3/700	全羅南道康津郡城田面秀陽里及び桃林里の優良農村を実写
朝鮮の農業	1929	2/474	代表的水利組合事業として知られる溢沃水利、大正水利、中央水利、干拓地並に農家の三大副業を表した
農村指導	1930	1/389	東洋拓殖株式会社が小作人に対し改良農法を指導する実況
北鮮開拓	不明	4/765	北鮮開拓の各種事業を咸鏡南北両道に跨って撮影
長津江水電工事	不明	2/495	22万キ口を越す長津江の水電工事状況を撮影
南原の砂防	不明	1/357	全羅北道南原に於ける砂防状況
北鮮の羊は語る	1934	2/544	咸鏡北道の綿羊飼育状況を撮影
朝鮮の窒素工場	不明	1/319	朝鮮窒素工業の状況を撮影
内地の農村	不明	1/281	山口県佐波郡石田村の灌漑設備、機械揚水、筑後平野、乾燥状況、車両運搬、脱穀等
女性は強し	不明	3/895	紡績工場の宣伝映画

朝鮮の水産	1927	2/412	代表的な朝鮮水産事業を紹介したもので鯖、明太、鱈、捕鯨、石首魚、市場、海苔の製造等
全南の海苔	1931	2/354	海苔の本場、全南莞島郡内の海苔の製造状況
天然氷採取	1923	1/207	漢江の凍氷を採取し上下両面の不純物を除去し橇で運搬する工程
警察			
国境冬の陣	1937	4/1,081	豆満江、鴨緑江の警備状況
国境警備異常なし	不明	1/130	恵山鎮国境警備演習の状況を撮影

出典：『朝鮮総督府キネマ』朝鮮総督官房文書課、1938年、43～49頁。

朝鮮紹介と施政宣伝映画製作の持続

この期間中に「活動写真班」が行なった製作業務を、本来の業務である朝鮮紹介と総督府施政宣伝映画製作、皇室関連及び社会教化用の映画製作の三つに分けることができる。

朝鮮紹介等宣伝映画の製作は補足撮影を加える形で、「活動写真班」の年中行事のように行なわれた。毎年各種の統計は変化し、各般の施設が開発されていくに従い、撮影を補っていかねばならなかったのである。又、朝鮮に登場し始めた劇映画が娯楽物として興味本位になっていくに従って、「活動写真班」の従来の宣伝映画も単純な実写映画だけではなく、観客に興味と感動を与えるように新しい形式が試みられるようになった。記録映画に日本俳優を登場させた『朝鮮の旅』（1925）、劇映画として作られた『羽衣天女物語』（1926）、映画形式を工夫して撮影した『昭和四年鮮満スケート大会』（1929）等がその例として挙げられる。

『羽衣天女物語』は「活動写真班」が製作した宣伝映画の中でも珍しい劇映画形式である。朝鮮第一の名勝地である金剛山の宣伝を目的に、その山と関連のある羽衣天女物語の伝説を映画にして、樵、獵師、天女等を登場させ⁸、観客の興味をそそろうとしたのである。

鴨緑江スケート大会の記録映画である『昭和四年鮮満スケート大会』も観客の興味を引くための撮影手法を工夫した。自由に動かせるよう四本柱の脚部に支那橇四台を付けた高さ三間の櫓を組み、氷点下25度という寒さの中で俯瞰撮影を試みたのである。氷に覆われた鴨緑江の広い大会会場、そこに集まった群衆、トラックを回る選手たちのスピード感溢れるシーンが俯瞰ショットで効果的に撮影されたに違いない。当時の資料にはこの映画について、「このフィルムは面白く出来上がり、朝鮮内は勿論、日本各方面でも多大な興味を以って歓迎された⁹」と紹介されている。

このような観客趣向の製作傾向により、朝鮮紹介の宣伝映画も興味を惹くよう製作され、社会教化の方面でも積極的に利用された¹⁰。その製作は日中戦争による総動員体制の中で映画政策が皇民化政策の一環となるまで続けられた。それらは主に朝鮮総督府の施政の業績を内外に知らせようとするもので、代表例を下記の表に挙げる。

表< 3 - 2 > 朝鮮総督府製作の業績宣伝映画の目録と内容

映画名	製作年	巻/米数	概要
躍進二十五年	1935	8/1,930	昭和10年10月始政25周年記念映画として25年間の躍進ぶりを撮影
躍進二十五年	1935	8/1,975	同(上映画のトーキー版)
踊る朝鮮	1936	8/2,000	朝鮮の各種産業、教育及び社会事業等を撮影した昭和11年のトーキー版
振興朝鮮	1937	5/1,158	同 昭和12年のトーキー版
朝鮮の展望	1932	2/600	内鮮満巡遊映画中の朝鮮関係に属するもので、新義州を出発して釜山に至るコースの風物産業を取入れたもの
周遊映画朝鮮篇	1932	2/500	上の映画のトーキー版
若き朝鮮の力	不明	3/770	教育、交通、産業等を主として取入れ、最も新しい朝鮮の姿を撮影
明け行く朝鮮	不明	2/641	朝鮮内が開け行く状況を撮影

出典：『朝鮮総督府キネマ』朝鮮総督官房文書課、1938年、36頁。

皇室関連映画の製作と献上

「活動写真班」による皇室関連の映画は、その設立と同時に製作され始めた。特に、3・1独立運動が鎮圧され、朝鮮内の時局が沈静化すると日本の皇族たちの朝鮮訪問が増え、関連映画製作も増加した。主に秩父宮、高松宮、閑院宮等の日本皇族の朝鮮訪問、李王世子¹¹の一時帰国の活動、侍従武官の朝鮮視察等の様子が時事映画として、又は記録映画として沢山作られた。

その内『国境御慰問の巻』5巻(1925年)、『朝鮮神宮関係映画』3巻(1925年)等は当時の斎藤実総督から天皇に、『李王家御親蚕の巻』1巻(1925年)等は朝鮮王純宗に¹²献上されるなど皇室関連映画は初期からその都度複製して皇室に贈られた。

朝鮮総督府によって製作された皇室関係の映画は、1937年(昭和12)末までには58巻が献上され、外国の皇族や貴族の訪問を記念して製作した映画も12巻寄贈された。その状況を次の表にまとめる。

表< 3 - 3 > 朝鮮総督府製作の皇室関連映画の目録と内容

映画名	年	巻数/米数	概要
東宮殿下御帰朝奉祝	1921	1/189	大正10年9月3日、皇太子が欧州から帰朝した日の京城の奉祝状況
閑院宮殿下京城御成	1922	1/182	閑院宮が京城を訪問した時、李王が南大

			門駅に出迎え、昌徳宮まで同行の場面
閑院宮殿下慶州御成	1922	2/468	閑院宮の慶州視察の様で、古跡保存会、鷄林、半月城、雁鴨池、九層塔、四面石仏等がある
李王世子同妃御帰鮮	1922	5/	
東宮殿下御成婚奉祝	1924	1/273	大正13年5月31日、皇太子成婚の大饗宴行われた日の京城の奉祝状況
侍従武官国境警備員御慰問	1925	5/	
京畿、慶南水害地へ侍従御差遣	1925	3/	
朝鮮神宮御霊代奉還	1925	3/	
大婚二十五年奉祝	1925	1/198	大正天皇成婚25年を奉祝する京城の状況
故李王殿下国葬	1926	2/552	大正15年6月10日、故大勲位李王の葬列の儀を撮影
高松宮殿下金剛山へ	1926	1/312	大正15年9月、高松宮の金剛山探勝の様で、第二艦隊長箭港入港から外金剛山探勝
高松宮殿下慶州御成	1926	2/349	大正15年10月、高松宮の慶州視察の様で、浦項御上陸から慶州古跡見学の状況
愁雲の京城	1926	1/203	大正15年12月25日、大正天皇崩御の報に接して各官庁の遥拝式及び町内の哀悼の状況
高松宮殿下京城御成	1928	2/404	昭和3年10月、高松宮の京城訪問の様
御大礼奉祝	1928	4/ 1,016	昭和3年11月10日から17日まで朝鮮内各地での奉祝状況
花の昌慶苑	1929	1/	
高松宮殿下水原平壤方面御成	1929	2/549	昭和4年4月、高松宮の水原と平壤方面の訪問状況を撮影
閑院宮殿下御視閲式	1929	1/215	昭和4年10月、龍山錬兵場で開催された視閲式の様を撮影
閑院宮殿下朝鮮博覧会御成	1929	1/286	同年10月1日、朝鮮博覧会開会式参席の状況を撮影
閑院宮殿下赤十字社総会台臨	1929	1/285	同年10月2日、赤十字社朝鮮本部の総会に参席の状況を撮影

閑院宮殿下 平壤方面御視察	1929	1/294	同年10月、平壤、鎮南浦方面視察の模様を撮影
閑院宮殿下 金剛山御探勝	1929	2/476	同年10月、金剛山探勝の模様を撮影
朝鮮博覧会	1930	2/	
秩父宮殿下朝鮮御成	1930	2/425	昭和5年5月、秩父宮が義州と京城を視察の模様を撮影
朝鮮水害	1930	2/	
国際連盟支那調査員 京城見物	1932	1/	
侍従軍隊警官御慰問	1933	3/801	昭和8年1月と2月、国境警備の将兵、警官を川岸侍従武官が慰問の光景
李王殿下朝鮮競馬大会御成	1934	1/	
侍従水害地御慰問	1934	3/	
郷軍、学生、青年団 御視閲式	1935	1/160	昭和10年10月16日、閑院宮が視閲の状況を撮影
白頭山	1935	2/	
李王殿下台覧競馬	1936	1/200	昭和11年、李王の競馬大会観覧の状況
侍従水害地御視察	1936	3/	
侍従武官国境視察	1937	3/ 1,100	昭和12年1月と2月、御手井侍従武官国境慰問の光景
東邇久殿下平壤御成	1937	1/200	昭和12年、平壤へ訪問の模様を撮影
皇太子殿下 御命名を寿ぐ京城	1922	1/313	皇太子命名当日の京城における奉祝状況を撮影
皇后陛下平博御成	1922	1/194	皇后、摂政宮、英国皇太子、平和博覧会朝鮮館訪問の状況を撮影
計		58巻	
外国皇族訪問記念映画			
仏国印度総督 メルラン大将	1924	2/	

仏国ジョッフル元帥	1925	2/	
瑞典皇太子殿下	1926	5/	
シヤム皇兄殿下	1930	3/	
計		12巻	

出典：『朝鮮総督府キネマ』朝鮮総督官房文書課、1938年、3～5、37～38頁を参考に作成。

「活動写真班」における映写活動の拡大

朝鮮総督府の「活動写真班」は社会教化及び宣伝映画を以って日本と朝鮮、満州地域での映写会を活発に行った。前章で述べたように1924年までは主に宣伝映画の巡回映写を中心に上映会が行われたが、1925年（大正14）以後は社会教化映画も加えられ、巡回映写以外にも常設館を設けて集中映写を試みるようになったのが特徴といえる。特に1920年代から産業発達と共に活性化していった博覧会の会場内には必ず映画常設館が設置され、「活動写真班」製作の映画を長期間にわたって上映した。博覧会における映写活動については次の項目で詳しく述べることにしたい。

日本国内での労役のために朝鮮人移住者¹³が増えるに従って毎年地域を換えながら広い範囲にかけて巡回映写が拡大していった。北海道では夕張郡内3箇所、本州では仙台、東京、浜松、豊橋、名古屋、桑名、京都、大阪、神戸、岡山、広島、下関、四国では高松、九州では門司、小倉、八幡、直方、鯉田、福岡、別府、以上23ヶ所に巡回映写を試みたが各地とも久しく朝鮮趣味から遠ざかっていた同胞達から大いに好感を得た¹⁴。

満州地域での朝鮮人対象の巡回映写も日本と同様に毎年続けられ、宣伝映画に社会教化映画が加えられた¹⁵。

「活動写真班」による朝鮮内での巡回映写はより多様に展開された。各種の大会や集会では宣伝映画や社会教化映画の出張映写会を催し、日本からの視察団、外国の観光団等に対しては常設の上映場で映画を観覧させた。朝鮮総督府ではそのために庁舎の5階に150人を収容できる映写室を設けた。

都合によっては総督官邸、政務総監官邸、京城にある朝鮮ホテル、京城大学、京城公会堂、京城社会館、明月館等にも出張し、日本や外国の艦隊が入港すると訪問映写をすることもあった。在朝鮮駐屯陸軍部隊¹⁶に対しては師団の希望により将兵に朝鮮事情の紹介や社会教化映画を上映した。

又、日本の皇族関係者が訪朝するとその宿所まで出張映写することもあった。1930年（昭和5）に高松宮、閑院宮が平壤と京城を視察したときには、「活動写真班」が平壤ホテルと京城竜山の旅館において朝鮮風俗、産業、教育関連等の映画を映写した¹⁷。

一般民衆を対象とする映写の中で特記すべきことは、総督府が群衆の集まる場所で固定的な野外映写会を開いて社会教化用の映画等を紹介したことである。京城の昌慶苑¹⁸に桜が咲くと

毎晩開放して、「花の映写会」を開き、社会教化に関する映画を毎晩作品を替えて上映した。当時の記録によると1929年（昭和4）のこの期間中の映写会に62,300人¹⁹の観客が集まった。

又5月の児童愛護週間²⁰、夏季の衛生週間等にも社会教化映画の上映会を開いた。10月1日から5日間は、朝鮮総督府施政記念に合わせて街頭に進出して「施政宣伝映画会」を、朝鮮神宮の秋祭りには神苑に銀幕を張って野外での「社会教化映画会」を試みたこともあった²¹。

3. 博覧会における映画利用

日本国内開催の博覧会における朝鮮総督府の映写活動

日本では1920年代から30年代にかけて博覧会が各地で盛んに行われ、会場では必ず映画を利用して集まった大衆に宣伝活動を展開した。朝鮮総督府でも博覧会に参加して「活動写真班」製作の映画を上映し、朝鮮を紹介したり総督府の治績を宣伝することに努めた。

例えば、朝鮮総督府は1922年（大正11）の東京平和博覧会に各外地の官庁と共に共同の常設館を特設して90日間にわたって朝鮮関連の映画を上映した。1928年（昭和3）の京都博覧会では朝鮮館内に常設映写場を設置して100日間の会期中82日間、毎日3回ずつ計246回の映写会を行なった。又1930年（昭和5）日本海戦後50周年を記念した東京博覧会では200回、1932年（昭和7）金沢博覧会では220回、同年大阪博覧会では182回、そして1937年（昭和12）名古屋、別府博覧会等各地で開かれた博覧会で朝鮮関連の映画を上映した²²。

朝鮮総督府は博覧会以外の小規模の展覧会や大会にも映写班を派遣して映写会を開いた。1929年（昭和4）3月に東京上野で食糧展覧会が開かれた折にも、総督府は同会場に朝鮮館を特設し、10日間連日連夜映写会を行なった。又、日本各地の農業大会では『朝鮮の農業』（1929）²³を、教育大会等では朝鮮の教育映画に関するもの²⁴を紹介した²⁵。日本国内で開催された博覧会で朝鮮総督府が映写会を行なったのは次の如くである。

表< 3 - 4 > 朝鮮総督府による映写会が行なわれた博覧会及び共進会

年度	開催地
1921	大分博覧会
1922	東京平和博覧会
1923	新舞鶴博覧会
1924	京都博覧会
1925	大阪及び熊本博覧会
1926	大牟田博覧会、長崎共進会
1927	福岡、松山、東京各博覧会
1928	別府、岡山、高松、東京、仙台、京都（246回）各博覧会
1929	東京共進会、広島博覧会
1930	東京（200回）、横須賀、山田各博覧会
1931	鹿児島（43回）、東京、浜松、札幌、長岡各博覧会
1932	東京（21回）、金沢（220回）、大阪（182回）、岡山（3回）、飯塚各博覧会
1933	東京、宮崎、大連各博覧会

1934	東京、岡山、長崎各博覧会
1935	熊本、呉、萩、横浜各博覧会
1936	岐阜、四日市、富山、大阪、津山、福岡各博覧会
1937	東京、名古屋、別府、高知、小樽各博覧会

出典：上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日、187頁、及び『朝鮮総督府キネマ』朝鮮総督府、1938年、9、10、16頁を参考して作成。

* ()内は朝鮮総督府開催の映写会の回数。

朝鮮博覧会における映画利用

朝鮮で博覧会が初めて開催されたのは1929年（昭和4）のことであった。ここでも勿論、映画は大きい役割を果たした。そこでは、日本の博覧会と同様に宣伝映画の映写だけではなく、社会教化用の映画を事前に数多く製作し、同時上映した。博覧会における映画の多大な利用は当時の朝鮮映画界にも大きい影響を及ぼしたものと思われる。

同年9月12日から10月31日まで50日間開かれた朝鮮博覧会は、予算と会場の規模の面でもかなり大規模なもので、支出予算が200万円（同年朝鮮における常設館入場料は最高席1円20銭、最低席10銭、平均65銭）²⁶を超え、会場は景福宮²⁷周囲の空地で10万余坪の広さに及んだ。このような巨大な博覧会を朝鮮で開催した理由はなんだったのか。それは、施政20周年（同年10月1日）を迎えて、朝鮮総督府の業績を世界に知らせるため、即ち、斎藤実総督の統治の基であった「施政の周知と宣伝を通じての内鮮融和」の一環として計画されたのである²⁸。朝鮮総督府が発行した『施政二十五年史』の朝鮮博覧会の概説にその趣旨がよく表れている。

朝鮮博覧会は謂うまでもなく鮮内に於ける文化の向上並に産業発達の状態と、政治上及び社会上其の他各般の施設を一同に展示し、総督府始政二十年に相当する昭和四年秋期に於て之を開催し、過去二十年間に官民一致の力に依って築き上げた所の実績を中外に闡明して将来の進歩に資し、又あまねく鮮外より多数の出品を求め、彼此比較し採長補短、相互の紹介に便し、なほこの機会に於て内外の観覧者を誘致して朝鮮に対する正しき理解を求め、相携えて半島の開発と国運の隆興に寄与せんとするものである²⁹。

朝鮮博覧会は文化政治を標榜し、内鮮融和を成すために展開してきた斎藤実総督³⁰の「施政の周知と宣伝」政策の結晶体でもあったのである。博覧会開催の趣旨が内外の大衆を誘致して過去20年間の業績を宣伝し、朝鮮の変化を理解させることにあった以上、朝鮮総督府が博覧会において映画を大いに利用しようとしたのは当然といえるだろう。

朝鮮博覧会の会場内の17ヶ所のパビリオンで映画行事が催された。その中には常設館のように映写が行われた所もあり、映画関連展示場の役割を果たした所もあった。以下のパビリオンは会場内に常設館としての設備を整えていたところである。

「活動写真館」	「社会館」
「美術工芸教育館」	「警務館」
「全羅南道館」	「山林館」
「朝鮮農会館」	「八幡製鉄所館」
「台湾館」	「航空研究所館」
「京城日々新聞社館」	

又、次は映画関連の展示及び陳列が催されたパビリオンである。

「産業南館」	「審勢館咸北部」
「参考館内大阪朝日」	「参考館内保険局」
「機械館」	「三井特設館」

以上17ヶ所の内で活発な上映会が行なわれたのは「活動写真館」と「社会館」で、50日間の会期中に1日3回ずつ、計300回連日上映が行なわれた。それぞれ正反対の映写システム、即ち「社会館」には昼間映写幕を「活動写真館」には暗室映写設備を備えた。「社会館」では専ら朝鮮における社会事業関連の映画を上映して相当の効果を収めた³¹。

朝鮮総督府は博覧会場内に映画常設館としての「活動写真館」を第二会場入口の正面に大規模に建設した。当時の『朝鮮』にその構造、規模及び内部の施設について詳しく紹介されており、当時の一般常設館の様子が伺われる。

常設館は木造119坪の平家建（1部2階）の中に、階下には4人用腰掛80脚と階上には特別席として4人用腰掛28脚でこの座席定員432名、そして平座の両側と後方に立ちたるままの観覧者を加えれば700名が収容できる。舞台に楯帳と紗幕を取り付け、拡声蓄音機、ラジオ、説明用音声拡大器を備え、機械室にはシンプレックス映写機2台を設置し、客席の両側に大型写真4枚を揚げ、表入り口の絵看板は朝鮮の代表的風景及び風俗を油絵に描いて随時取り替えることとし、館長神尾壺春氏以下13名の職員及び傭人を配して、9月12日博覧会開場式当日から映写公開を行った³²。

「活動写真館」における上映映画には朝鮮総督府社会課の社会教化関連映画が多かったが、他の官庁や日本、台湾、満鉄等からの宣伝用の映画も数多く出品された。社会課の『朝鮮産業歌』を映画化した2巻もの、その他同課提供の18種34巻を始めとし、開懇課より3巻、水産課より1巻、逓信局より48巻、台湾総督府より5巻、南洋庁より11巻、静岡県より1巻、東洋拓殖株式会社より10巻、朝鮮紡織より2巻、大阪商船より8巻、満鉄より21巻、咸鏡南道より4巻、計66種、150巻を毎日3回23、4巻ずつ交代に上映した³³。

内容は地理、名勝、風俗、産業、教育、交通等を素材にした宣伝および社会教化用のもので、

代表的な映画は、社会課の『朝鮮産業の歌』（1929）、『銀貨の朝鮮物語』（1927）、『金剛山の実写』、『朝鮮の雅楽』、鉄道局の『朝鮮八景十六勝』（1929）³⁴、通信局貯金宣伝の『明暗に路』と保険宣伝の『里吹く嵐』等がある。特に、東洋拓殖株式会社が提供した映画は、何れも朝鮮における農業及び林業経営を指導する社会教化映画で、毎日数巻ずつ弁士付で上映された。外地からのものはその地域の紹介映画が多く、南洋庁の『我が南洋』³⁵、台湾総督府の『伸び行く台湾の工業』等があり、満鉄は満州の風物を取入れた宣伝映画を提供した³⁶。

中でも『銀貨の朝鮮物語』という映画は会期中最も人気が高かった。この作品は、1927年（昭和2）に朝鮮総督府が製作した5巻もので、50銭の銀貨が朝鮮旅行者の懐中に入り、朝鮮の各地を視察した感想を映画にしたものである。無声映画時代の作品にも拘らず、銀貨が語っている設定が面白がられた。前記の綿羊飼育奨励映画の『北鮮の羊は語る』（1934）も擬人化映画で、羊が1人称でオーストラリアから北鮮までの移動の状況と飼育の環境について物語っている³⁷。

映画が社会教化の方面に利用されるようになってから、映画の表現形式や映写の技術が多様に試みられるようになった。朝鮮博覧会で公開された映画も人々の関心を引くために内容や映写方法が色々と工夫された。特に、映画の無声時代における音声の試みには観客の注目が集まった。博覧会の映写には朝鮮内外の優秀レコード140枚を取り備え、各場面に合わせて最も適当な伴奏をしたので映画を見る観客の楽しみは倍増した。

『朝鮮の雅楽』の映写がその代表的な例で、朝鮮王朝における伝統宮中音楽を撮影したものである。朝鮮の一般人にとっても珍しかったその演奏場面に観客の関心が高まったのも当然なことであるが、映写班はこの宮中音楽の映画に合わせて伴奏用の雅楽レコードを流したので、その映像と音楽に観客達は大いに感動したという³⁸。

「活動写真館」では集客と宣伝及び教化の効率を高めるために定期上映以外にも多様な催しを開いた。即ち、毎日曜、祭日等には特別興行日として宣伝映画の幕合いにニュース映画を挿入し、「世界名映画デー」、「児童映画デー」、「社会教化映画品評会」、「外地紹介デー」、音楽会およびポスター展覧会等も開催した。

その内「社会教化映画品評会」は朝鮮内における教化映画の普及奨励を促進する目的で開かれた。応募作として劇映画は2千尺以上、実写映画は1千尺以上、線画物³⁹若しくは実写映画との混合映画は1千尺以上と限定し、朝鮮博覧会開場当日までの1年以内に製作された最新作とした。

審査の結果、高橋章之助の『猛火と消防手』という8巻物が金盃1個の1等賞をもらった。内容は故消防手福田宗太郎の一代記で、内鮮融和をテーマに殉職までの経路を描いた社会教化物であった⁴⁰。「社会教化映画品評会」への応募資格を朝鮮に居住する民間の映画製作者に制限したが、それは朝鮮内の社会教化映画プロダクションの活性化を図ろうとしたためと思われる。

朝鮮博覧会「活動写真館」での上映会は大成功を収めた。50日間の会期中の入場観客は305,019人で⁴¹、朝鮮博覧会有料入場人員986,000人⁴²の内の約3割がここで映画を観覧したことになる。当時映画というものが如何に民衆の人気を集めていたかを物語っている。

4. 映画の官庁利用とフィルム・ライブラリー運用

社会教化における映画の利用が拡大すると「活動写真班」だけによる映写活動には限界があった。社会教化の必要性が高まると共に、各道の内務部、各官公署、新聞社、科学館児童映画デー、府民館の学友映画会、金融機関等に映画班が設置されるようになった。

官公署のうち映画班を設置したのは、各道以外に鉄道局、逓信局、専売局がある。鉄道局は旅客誘致や従業員とその家族の慰安のために早くから映画班を設けて巡回映写に当て、さらには鉄道会館に常設館を開設して局員と家族を対象に、優秀映画や時局ニュースを毎週土曜日に定期的に上映した。逓信局でも前章で述べたように映画班を1922年（大正11）に設置して地方を巡回し、1937年（昭和12）には逓信会館を新築してその4階に数百人を収容できる映画館を開設した。専売局では1933年（昭和8）から文書課の「活動写真班」⁴³に依頼して全国の煙草耕作組合を対象に巡回映写を行なったが、その後京城、大邱、全州、平壤の四つの地方専売局に16ミリ映画班を設け、各地方局館内で巡回映写した。金融組合でも巡回映写のために各道支部に弁士と映写技師を雇用して35ミリ映画班を設置した。同映画班では1937年（昭和12）に282回の映写会を開催し、676,550人⁴⁴の組合員が農産漁村の振興運動用等の教化映画を観覧した。

官公署以外にも、1930年代中盤、大阪毎日及び大阪朝日新聞の京城両支局と京城日報社ではトーキーの映画班を設置して読者を対象に映画を上映した。

以上のように社会教化を目的に、各官公署及び団体等に数多くの映画班が設けられたが、これらの映画班は映画の製作はせず、専ら映写のみを担当した。そして映画の製作供給は総督府の「活動写真班」に頼った。「活動写真班」では自作映画や各官公庁からの依頼で作った作品、又はプロダクション等から購入した映画を所蔵し、必要に応じて各官庁及び団体の映画班に貸出した。

表< 3 - 5 > 朝鮮総督府傘下官公庁の映画利用目録
- 1927年（昭和2）から1932年（昭和7）まで

映画名	製作年度	巻数	本数
銀貨の朝鮮物語	1927	5	-
四季の行事	1927	2	1
麦稈真田の製造	1927	1	2
朝鮮の水産	1927	2	4
第三回朝鮮神宮競技	1927	5	1
高松宮殿下京城御成	1928	1	1
社会事業大会	1928	1	-
救護施設	1928	1	-

児童保護	1928	1	-
特殊教育	1928	1	-
職業紹介	1928	1	-
授産事業	1928	1	-
福利施設	1928	1	-
教化施設	1928	1	-
感化院	1928	2	2
児童愛護	1928	1	21
同(朝鮮文タイトル)	1928	1	8
朝鮮の労働	1928	4	3
御大礼奉祝	1928	4	1
釈王寺	1928	1	-
水力電気工事	1928	1	1
鮮満スケート大会	1928	2	2
高松宮殿下水原平壤方面御成	1929	1	1
閑院宮殿下御親閲式	1929	1	1
同 平壤方面御視察	1929	1	1
同 金剛山御探勝	1929	2	1
朝鮮八景	1929	1	2
朝鮮十六勝	1929	1	4
花の昌慶苑	1929	1	5
朝鮮の農業	1929	2	9
朝鮮博覧会	1929	2	2
同 開場式	1929	1	1
濟州島	1929	2	1
鮮満スケート大会	1929	2	2
秩父宮殿下朝鮮御成	1930	2	1
栄ある農村	1930	2	9
農村謳歌の教育	1930	2	3
農村指導	1930	1	3
海上生活	1930	1	3
英文 栄ある農村	1930	3	-
英文 農村謳歌の教育	1930	2	-
昭和5年の風水害	1930	2	3

同上	1930	1	3
鴨緑江の筏	1930	1	21
京城神社大祭	1930	2	1
師団対抗演習	1930	1	1
青訓演習会	1930	2	2
鮮満スケート大会	1930	1	2
日独陸上競技大会	1930	2	1
岩裂く松(劇)	1930	4	4
鯨漁業	1931	1	2
桜蝦	1931	1	2
全南の海苔	1931	2	3
天長節祝賀会	1931	1	1
雛人形贈呈式	1931	1	1
同 歓迎会	1931	1	1
特命検閲使親閲	1931	2	1
乗馬大会	1931	2	1
凧揚げ大会	1931	1	-
京城府会議員選挙	1931	1	1
三防スキー大会	1931	1	1
学生訪欧飛行	1931	1	-
李王家古典舞楽	1931	1	3
朝鮮神宮例祭	1931	1	1
我等の警察(劇)	1931	1	2
起てよ青年	1932	1	1
郷土は輝く	1932	2	2
大邱の地人形祭	1932	1	-
満州派遣軍隊の迎送	1932	1	-
献納機命名式	1932	1	-
満州事变戦没者招魂祭	1932	1	-
天長節祝賀会	1932	1	-
忠北及荒演林野	1932	1	1
咸南の火田民	1932	2	-
咸北は輝く	1932	5	-
山林大会	1932	1	-
博文寺上棟式	1932	1	1

同 落成式	1932	1	1
朝鮮の展望	1932	2	-
国際連盟支那調査団 京城見物	1932	1	-
タンパクヤ	1932	6	1

出典：「中央官公庁団体文化映画利用状況」『国際映画年鑑昭和9年』国際映画年鑑社、366～367頁を参考にして作成。

1938年（昭和13）の統計によると朝鮮総督府が所蔵していた映画は295種、841巻⁴⁵に上った。総督府ではこれを総紀（8種）、皇室関係（25種）、教育・神社・宗教（14種）、時事（39種）、社会事業（31種）、自力更生（9種）、産業（43種）、警察（4種）、体育（13種）、地理（11種）、風俗（13種）、名勝・旧跡（14種）、日支事変関係（7種）、其の他（8種）、購入及び寄贈映画（56種）⁴⁶に大別して目録を作って所蔵した。

1920（大正9）年朝鮮総督府の「活動写真班」が設置されてから1937年（昭和12）までの18年間に行われた貸出数は総9,760巻、使用延日数は402,511日、これを平均すると年間543巻、使用延日数22,362日という膨大な実績になる。『朝鮮』誌はこの大規模なフィルム・ライブラリーは恐らく日本とその植民地において最大なものであると評価した⁴⁷。

朝鮮総督府の所蔵映画は外国人にも貸出された。英文字幕を付けて、朝鮮を訪ねた外国人視察団や観光客に朝鮮事情を紹介し、日本駐在の大公使館或は特殊団体に寄贈して映写を依頼した。又アメリカに4種20巻、英・佛両国に各1種5巻、スイス1種6巻、其の他ロシア、中華民国等に朝鮮の名勝、風俗その他諸施設を外国人に宣伝することを目的として長期間貸出したこともある⁴⁸。

朝鮮総督府の映画の貸出制について特筆すべきことは、社会教化映画がこの制度によって一般常設館へ進出したということである。1929年（昭和4）から朝鮮総督府ではフィルム・ライブラリーの社会教化用の映画を貸出して一般興行映画と共に上映するようにしたが、その結果1930年代中盤には「活動写真班」製作の映画が京城府内の何れかの常設館で上映されていない程であった⁴⁹。

1924年（大正13）に「活動写真班」が社会課に移管され、映画による社会教化に積極的に乗り出すようになると、映画の貸出が急増した。それで朝鮮総督府では、1927年（昭和2）から各官公庁及び団体に映画の払下を実施することにした。払下の価格は35ミリ及び16ミリとも実費として1メートルの単価40銭であったが、1937年（昭和12年）9月以後は為替管理の影響による生フィルム価格の暴騰のため1メートル60銭に値上げされた。払下制度により、映写施設の整ったところでは必要な映画を購入して長期間にわたって社会教化映画を映写できるようになった。

表< 3 - 6 > 「活動写真班」における映画製作と利用の状況

年度	新撮影巻数	新撮影米数	映写回数	貸付巻数	貸付延日数
1920	18	7,420	49	-	-
1921	20	8,600	66	8	2,048
1922	39	17,800	93	66	10,015
1923	44	29,100	132	168	7,339
1924	36	18,180	123	345	7,524
1925	38	11,900	192	645	24,704
1926	43	20,400	193	755	36,029
1927	36	10,900	203	653	67,427
1928	32	8,787	505	1,032	25,135
1929	60	26,540	465	856	34,793
1930	31	14,000	510	679	30,650
1931	26	14,000	360	725	18,478
1932	36	12,420	710	699	20,430
1933	36	12,424	214	710	23,392
1934	43	17,500	310	708	21,477
1935	56	17,900	330	836	21,296
1936	52	16,900	336	653	22,071
1937	33	12,700	392	822	29,702
計	679	277,471	4,733	9,760	402,511

出典：津村勇「文化映画の展望」『朝鮮』朝鮮総督府、1938年2月1日、273号、148～149頁を参考にして作成。

* 但し上の数字中の撮影統計には総督府以外からの依頼で製作した映画は含まれない。

5. 社会教化手段としての映画推薦制度の導入

朝鮮総督府では1929年（昭和4）4月から内務局社会課に政務總監を会長とする朝鮮社会事業協会において映画の推薦業務を始めた。社会教化映画の製作を奨励し、これを広く普及しようとの趣旨で、映画の所有者の出願により、映画の内容が善良で社会教化に役立つ「優良映画」を推薦映画として選定した。

元来、推薦映画制度は、日本において映画の悪影響から青少年を保護し、映画の改善と優良映画の普及のために映画の草創期から行われていた。文部省では早い時期から民衆娯楽の改善に着手し、その一環として学校教育と社会教育に甚大な影響を与える映画について1911年（明治44）、通俗教育調査委員会に「幻燈映画及び活動写真フィルムに関する認定」の制度を設けた。この認定映画は大体教科書の補助として、知識の啓発に役立てようとするものであるから、観衆も限られ、又娯楽性も特別な範囲に限られていた⁵⁰。1920年（大正9）には認定映画からさらに範囲を拡張して推薦制度が導入され、文部省普通学務局社会教育課管轄の社会教育調査委員会が選定した。その趣旨について『日本映画年鑑 大正十三・四年』には次のように説明されている。

現在行われている民衆娯楽の中でも活動写真が一般社会に及ぼす影響の甚大なることは

普く世の認めるところでこれが改善発達を企図することは刻下焦眉の急務である。されば映画改善及び利用に関する機運を促進するの一助として之を民衆娯楽の本質からみて或は教育的或は娯乐的に或は芸術的に相当の価値があり且大体に於いて問題のない映画を調査し之を本省に於いて社会一般に推薦することとした次第である⁵¹。

上記のように映画の推薦にあたり教育的、娯乐的、芸術的価値を判断基準とした。従って、推薦映画の分類も日本と外国物をそれぞれ教育的、娯乐的、芸術的なものに分類し、それを又一般向けと成人向けに指定して行なわれ、選定された推薦映画は官報に掲載して告知した。

しかし、多数の推薦映画を用意しても利用率が低かったため、1931年（昭和6）文部省は社会教育調査委員会を廃し、新たに民衆娯楽調査委員会を設けて推薦制度を改善した⁵²。従来の推薦映画の基準を、芸術的映画から娯楽映画に置き換え、興味ある大衆向けの性向にした。又、選定された映画の告知も、官報以外に毎週1回推薦映画週報を発行して主要新聞社、通信社等に配布し、毎月1回月報を発行して教育映画関係の主要雑誌社、各種団体及び学校等に配布し、更に毎年1回年報を発行して推薦映画の積極的な活用を誘導した。

朝鮮総督府の推薦映画制度はその推薦規定をみると、趣旨やシステム等が文部省のものと同様であることが分かる。

活動写真「フィルム」推薦規程

- 第一條 活動写真「フィルム」の製作者販売者若しくは活動写真の興行者は其の製作販売又は興行に係る「フィルム」にして社会教化に適するもの民衆娯楽、内地朝鮮事情の相互紹介若しくは芸術的に価値あるものと思惟したるときは其の「フィルム」の推薦を朝鮮社会事業協会に申込みことを得
- 第二條 第一條に依り推薦を申し込むものは申込書に該「フィルム」説明書及推薦料を朝鮮社会事業協会に差出すべし
前項に依り差出たる「フィルム」は試写の後之を還付す
但し保管中物件の滅失毀損其の他の損害に関しては朝鮮社会事業協会は一切其の責に任せず
- 第三條 推薦料は一巻50銭とす
但し事情に依り免除することを得
- 第四條 推薦料は現金又は郵便為替にて納付すべし
- 第五條 「フィルム」を推薦したるときは申込者に推薦証書を交付す
- 第六條 「フィルム」の全部が推薦済のものにあらざれば之を推薦「フィルム」として発表することを得ず
各別に推薦したる「フィルム」の一部を組み合わせ独立の「フィルム」を作製せる場合亦同じ
- 第七條 推薦したる「フィルム」の題号申込者の住所氏名は朝鮮総督府雑誌『朝鮮』及朝

朝鮮社会事業協会発行の雑誌『同胞愛』並に新聞紙上に掲載し各道府に対しては別に通牒を發す⁵³

推薦映画の価値基準を定めている上記の第一條から、朝鮮總督府で行なつた映画の推薦制度が日本文部省の同制度に影響されたのは明らかである。しかし、文部省の第一の推薦基準である教育的価値が、朝鮮では社会教化的価値のあるものになつており、内鮮融和を追求する『内鮮事情』紹介の作品が含まれることに注目する必要がある。それは朝鮮總督府の映画推薦における主な目的が社会教化と内鮮融和にあつたということの意味している。

推薦制度が実施された初年の1929年（昭和4）、推薦と決定された映画の内容は、（1）国家社会の一員として必要な徳性及び常識を涵養させるもの、（2）民衆の趣味の純化向上に役立つもの、（3）衛生觀念の普及に役立つものの三つの項目になっている。（1）に該当する映画には、『純精神の如し』（6巻）、『猛火と消防手』（8巻）、『君が代』（8巻）の3本、（2）の作品には『蒼空』（1巻）、『花咲爺』（3巻）、（3）の作品には『闇より光へ』がある⁵⁴。『猛火と消防手』は前述したように同年開催された朝鮮博覧会の社会教化映画品評会において1等賞をもらった内鮮融和を内容とした作品であり、何れの作品も社会教化を目的に作られている。

朝鮮において推薦制度が始まつた頃の日本の同制度は、前述のように映画業界から関心を持たれなかつた。しかし、朝鮮總督府ではこの制度によって映画業界の関心を高め、社会教化映画の製作と普及の活性化を図るために、製作者、興業者、一般大衆、官公庁及び社会団体に多様な政策を展開した。

先ず社会教化性の強い映画に対しては、上記第三條により50銭の推薦料を免除して製作を奨励した。又同年から常設館に「活動写真班」の社会教化映画を貸出して一般興行映画と同時に上映するようにしたのも社会教化映画の活性化政策と無関係ではないだろう。推薦映画の告知も官報に限らず、第七條のように雑誌、新聞、各道府への各種の通牒（週報を含め）等、立体的な方法を通じて展開した。朝鮮總督府では文部省より9年程遅れて推薦制度を導入したが、社会教化方面の利用の活性化においては一足早かつたといえよう。

尚、推薦のお願いは映画の製作者や所有者、配給者のいずれも可能で、当時の推薦映画の目録からみると朝鮮において製作されたもの以外にも日本映画や外国からの輸入映画を問わず、趣旨に符合すれば推薦されたことが分かる。朝鮮總督府が1937年（昭和12）まで推薦映画として選定したものには75本ある。

表< 3 - 7 > 推薦映画目録

推薦番号	映画名	製作者	所有者	推薦年月日
第1号	純精神の如く	岡崎プロダクション	金東周	昭和4年5月9日
第2号	花咲爺	東亜キネマ株式会社	徳永熊一郎	昭和4年7月17日
第3号	君が代	東亜キネマ株式会社	徳永熊一郎	昭和4年7月17日

第4号	蒼空	オオタ映画製作所	太田同	昭和4年7月17日
第5号	猛火と消防手	朝鮮教育新聞社	高橋章之助	昭和4年7月17日
第6号	暗より光へ	半島キネマ協会	遠藤一二	昭和4年7月17日
第7号	戦艦三笠	森本プロダクション	矢野克己	昭和4年11月28日
第8号	日露大戦争	大阪フィルム商会	徳永熊一郎	昭和5年3月6日
第9号	明治大帝の御英姿 日露戦争の中心人物	大阪フィルム商会	徳永熊一郎	昭和5年3月6日
第10号	歩	朝日キネマ市川撮影所	岩松洋行 教育活動写真部	昭和5年9月10日
第11号	皇国の鑑	日本キネマ製作所	徳永熊一郎	昭和6年1月7日
第12号	世界横断	マーチンジョンソン	宮川早之介	昭和6年2月16日
第13号	義勇消防	京城大朝キネマ社	津守秀一	昭和6年6月26日
第14号	不滅親鸞	大熊映画製作所	松田善治	昭和6年9月11日
第15号	日本南極探検	探検隊写真班	徳永熊一郎	昭和6年10月19日
第16号	日本二十六聖人	日活株式会社	平山政十	昭和6年11月4日
第17号	意南嶺三十七勇士	東亜キネマ会社	松原留七	昭和7年1月14日
第18号	忠烈肉弾三勇士	東活映画株式会社	徳永熊一郎	昭和7年3月8日
第19号	二宮尊徳翁一代記	大日本報徳社	朝鮮報徳社	昭和7年6月27日
第20号	誉れの消防手	津守秀一	木浦消防組	昭和7年7月17日
第21号	仲よい友達	エデケショナル	宮川早之介	昭和7年7月17日
第22号	タイガ	米国エヒツツス会社	宮川早之介	昭和7年7月17日
第23号	カメラを持つ男 之がロシヤだ	ソユーツキノ社	宮川早之介	昭和7年7月17日
第24号	生存の闘争	ソユーツキノ社	宮川早之介	昭和7年7月17日
第25号	誉れの消防手	津守秀一	津守秀一	昭和7年12月16日
第26号	光を目指して	京城大朝キネマ社	津守秀一	昭和8年2月10日
第27号	三月十日	塚本洋行	塚本洋行	昭和8年6月7日
第28号	呼ぶアジア	塚本洋行	塚本洋行	昭和8年6月7日
第29号	誉れの消防手 徳太郎やあい	帝國消防思想普及会	秋山作次郎	昭和8年10月19日
第30号	海底	ジェー、イー、 ウヰリアムソン	宮川早之介	昭和9年1月25日
第31号	警察官	新興キネマ株式会社	仁戸田隆	昭和9年2月17日
第32号	海の生命線	横浜シネマ商会	小岩鉄彌	昭和9年3月28日
第33号	片仮名忠義	宝塚キネマ株式会社	徳永熊一郎	昭和9年4月1日

第34号	野の光	日本活動写真株式会社	中谷貞頼	昭和9年9月1日
第35号	消防手	新興キネマ株式会社	新興キネマ株式会社	昭和9年9月18日
第36号	爆撃飛行隊	T0太茶発声 映画株式会社	西田昇	昭和9年10月10日
第37号	千九百三十六年	アジア映画社	花岡元蔵	昭和9年10月25日
第38号	君国の為に	赤沢キネマ製作所	花岡元蔵	昭和9年10月25日
第39号	美しの吉岡先生	日本活動写真株式会社	中谷貞頼	昭和9年11月7日
第40号	大号令	大都映画株式会社	園田末三郎	昭和9年11月22日
第41号	東郷元帥	帝國教育映画研究会	園田末三郎	昭和10年3月15日
第42号	乃木將軍	日本活動写真株式会社	日本活動写真株式会社	昭和10年4月1日
第43号	召集令	日本活動写真株式会社	日本活動写真株式会社	昭和10年5月20日
第44号	起てよ国防に	大日本旭旗会	石井櫻村	昭和10年5月25日
第45号	北進日本	横浜シネマ商会	小岩鉄彌	昭和10年5月25日
第47号	極東の嵐	振進キネマ者	岡崎敏男	昭和10年7月1日
第48号	愛の燈台守	プリンシパル社	小岩鉄彌	昭和10年8月15日
第49号	水兵の母	日本教育映画会社	小岩鉄彌	昭和10年8月15日
第50号	肉弾三勇士	模範教化映画協会	小岩鉄彌	昭和10年8月15日
第51号	明け行く人生	朝鮮教育映画制作所	佐古種蔵	昭和10年8月27日
第52号	靖国神社の女神	河合映画社	徳永熊一郎	昭和10年10月25日
第53号	結核の予防	独逸ウフアー会社	土肥武雄	昭和10年11月5日
第54号	少年靴屋	日本活動写真株式会社	松方乙彦	昭和10年11月10日
第55号	意無情	ユナイテッドアーチス 会社	小岩鉄彌	昭和11年2月3日
第56号	戦艦エムデン	エメルカトービス映画 社	小岩鉄彌	昭和11年2月3日
第57号	夢は坊やの枕もと	日本活動写真株式会社	日活京城出張所	昭和11年2月12日
第58号	キングオブキング	パターインターナシヨ ナル社	安商鴻	昭和11年2月15日
第59号	東郷元帥の一生	太平洋シネマ	上田熊五郎	昭和11年3月10日
第60号	青年日本を語る	地上映画者	上田熊五郎	昭和11年3月10日
第61号	新曲五郎正宗	日本活動写真株式会社	岡崎敏男	昭和11年4月30日
第62号	赤道越えて	大秦発声映画社 横浜シネマ商会	岡崎敏男	昭和11年5月11日
第63号	護国の母	日本活動写真株式会社	日本活動写真株式会社	昭和11年8月10日
第64号	小楠公とその母	日本合同映画社	松田善治	昭和11年9月7日

第65号	生命の冠	日本活動写真株式会社	日本活動写真株式会社	昭和11年9月7日
第66号	妖鬼イレヤー	エイス・プロダクション	松田善治	昭和11年9月7日
第67号	非常線	日本活動写真株式会社	日本活動写真株式会社	昭和11年11月18日
第68号	小公子	米国セルズニックインターナショナル	小岩鉄彌	昭和11年12月20日
第69号	国防全線八千キロ	日本活動写真株式会社	日本活動写真株式会社	昭和11年12月26日
第70号	北満の落花	ハルビン六烈士事跡保存会	ハルビン六烈士事跡保存会	昭和12年5月5日
第71号	勤王の母野村望東尼	合同映画社	長谷川與三松	昭和12年7月2日
第72号	不滅乃木	セカイフィルム社	李創用	昭和12年9月4日
第73号	怒涛を蹴って	写真化学研究所	東宝映画株式会社	昭和12年9月28日
第74号	日本帝国軍歌集	日本アーティストガイド社	岡崎敏男	昭和12年11月20日
第75号	愛国六人娘	東方映画株式会社	藤本省三	昭和12年12月27日

出典：『朝鮮総督府キネマ』朝鮮総督府官房文書課、1938年、26～31頁を参考して作成。

朝鮮総督府の「活動写真班」は1920年（大正9）から1937年（昭和12）まで、撮影679巻、上映4,733回⁵⁵という業績を上げ、内鮮融和、総督府の施政宣伝及び社会教化のための映画業務を続けた。

しかし、日中戦争の勃発と共に、文書課「活動写真班」は常例的な映画製作活動である宣伝映画や社会教化映画の製作を中止し、専ら時局認識と銃後の朝鮮としての心構えを指導する映画の製作及び上映活動に集中するようになった。

朝鮮総督府の同化政策は日中戦争と共に兵站基地構築のための皇国臣民化政策へと変わり、映画もその手段として、より強圧的に利用されるようになっていく。つまり映画そのものが朝鮮総督府の統制下に置かれ、本論文第2部のテーマである国策映画として戦争に動員されていたのである。

第3章

- ¹ 山根幹人『社会教化と活動写真』帝國地方行政学会、同朝鮮本部、1923年、54～81頁。
- ² 『日本映画年鑑 大正十三・四年』東京朝日新聞社アサヒグラフ編集部編纂、1925年、37頁。
- ³ 津村生「総督府の活動写真」『朝鮮』朝鮮総督府、1926年6月1日、87頁。
- ⁴ 咸鏡北道の緬羊飼育状況を撮影した15分程度の短編記録映画で、オーストラリアから朝鮮へ運ばれた羊が自分の身上を物語る面白い形式で作られている。このフィルムは日本国立近代美術館フィルムセンターが発掘し、2003年6月に一般公開された。又、フィルムセンターの協力により、2003年9月に韓国の光州国際映画祭でも公開されたことがある。
- ⁵ 津村勇「文化映画の展望」『朝鮮』朝鮮総督府、1938年2月1日号、153頁。
- ⁶ 『朝鮮総督府キネマ』朝鮮総督官房文書課、1938、6頁。
- ⁷ 『施政二十五年史』朝鮮総督府、1935年、326頁。
- ⁸ 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、53頁。
- ⁹ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、185頁。
- ¹⁰ 津村生「総督府の活動写真」『朝鮮』朝鮮総督府、1926年6月1日号、87頁。
- ¹¹ 1907年日本に連れて行かれた韓国の皇太子は日韓併合以降李王世子と称した。
- ¹² 津村生「総督府の活動写真」『朝鮮』朝鮮総督府、1926年6月1日号、86～87頁。
- ¹³ 朴慶植『朝鮮人強制連行』未来社、1965年、22、28頁。

< 地域別在日朝鮮人居住者統計 >

年度 / 地域	1930	1920	1915
大阪府	96,343	6,290	399
東京府	38,355	2,485	539
愛知県	35,301		
福岡県	34,639	7,833	547
京都府	27,785	1,018	
兵庫県	26,121	3,770	218
山口県	15,968		494
北海道	15,560	3,462	
神奈川県	13,181		
広島県	11,136	1,173	
長崎県		2,800	358
大分県			174
佐賀県			107

* 1930年居住地域人口統計は一万人以上の地域

- ¹⁴ 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、10～11頁。
- ¹⁵ 『増補朝鮮総督府三十年史』株式会社クレス出版、1999年、981頁。
- ¹⁶ 『日本映画年鑑昭和四年・五年版』東京朝日新聞社、1930年、591～592頁。

< 映写機所有部隊 >

陸軍造兵廠平壤兵器製造所 朝鮮平壤府
 朝鮮軍司令部 朝鮮京城
 第十九師団司令部 朝鮮京城
 第二十師団司令部 朝鮮京城
 歩兵七十五連隊 朝鮮京城

- ¹⁷ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、188頁。
- ¹⁸ 京城にある朝鮮時代の王宮だが、朝鮮総督府がそこを動物園にして桜を苑内に植えた。動

物園は解放後撤去された。

- 1⁹ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、188頁。
- 2⁰ 映画館に入場できない子供のために催された。
- 2¹ 津村勇「文化映画の展望」『朝鮮』朝鮮総督府、1938年2月1日号、146頁。
- 2² 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、16頁。
- 2³ 水利組合の事業の中でも代表的な事例として知られていた益沃水利、大正水利、中央水利、干拓地並びに農家の3大副業のことを表した映画。
- 2⁴ 当時朝鮮総督府活動写真班が製作して利用した朝鮮の教育に関する映画で、普通学校、女子高等普通学校、高等普通学校、専門学校、京城大学を撮影した『教育』（1922）、永興学校の感化教育及び済生院盲聾部の教育状況を記録した『特殊教育』（1928）等があった。
- 2⁵ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、187頁。
- 2⁶ 前掲書、『日本映画年鑑昭和四年・五年版』、352頁。
- 2⁷ 高宗皇帝の居住及び執務した朝鮮最後の王宮
- 2⁸ 朝鮮博覧会は1921年（大正10）『施政の周知と宣伝』政策が実施された斎藤実総督初期に産業調査会の決議が発端となった。
- 2⁹ 前掲書、『施政二十五年史』、601頁。
- 3⁰ 朝鮮博覧会は朝鮮総督府第4期の山梨半造総督（在任期間1927年12月10日～1929年8月12日）時代の予算で準備されたが、開催1ヶ月前に斎藤実が総督に再任命され（在任期間1919年8月12日～1927年2月12日と1929年8月17日～1931年6月17日）博覧会を迎えた。
- 3¹ 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、14頁。
- 3² 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、189頁。
- 3³ 同上、189～190頁。
- 3⁴ 「中央官公庁団体文化映画利用状況」『国際映画年鑑昭和九年』国際映画年鑑社、367頁によると『朝鮮八景』と『朝鮮十六勝』はそれぞれ1巻の別のものとなっている。
- 3⁵ 南洋の人情風俗を描いた6巻もので、南洋庁派遣員の面白い説明と珍しい風俗場面から入場客の高い関心を集めた。
- 3⁶ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、190頁。
- 3⁷ 映画はサイレントであり、羊の語りを字幕処理している。
- 3⁸ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、190頁。
- 3⁹ 現在のアニメーションのこと。
- 4⁰ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、192頁。
- 4¹ 同上、194頁。
- 4² 前掲書、『施政二十五年史』、602頁。
- 4³ 「活動写真班」は1920年4月に文書課に新設され、1924年（大正13）12月社会課に移管されたが、1932年（昭和7）2月に再び文書課に移管された。前掲書、『施政二十五年史』、984頁。
- 4⁴ 津村勇「文化映画の展望」『朝鮮』朝鮮総督府、1938年2月1日、273号、154～155頁。
- 4⁵ 朝鮮総督府製作の映画は239種679巻、外部から購入したものは56種162巻含まれていた。
- 4⁶ 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、36～61頁の目録参照。
- 4⁷ 津村勇「文化映画の展望」『朝鮮』朝鮮総督府、1938年2月1日、273号、147頁。
- 4⁸ 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、18頁。
- 4⁹ 同上、20頁。
- 5⁰ 中田俊造（文部省学芸官）「吾国に於ける教育映画の近況」『映画教育』文部省普通学務局社会教育課編著、1928年5月、44～45頁。1911年（明治44）「通俗教育調査委員会」によって認定を受けた幻燈映画の数は41種1,009枚であったが、1922年（大正11）後は活動写真に圧倒され、幻燈映画の出願はなかったという。又、活動写真の認定数は相当数あり、1927年（昭和2）11月までに270種、619巻に上っている。
- 5¹ 前掲書、『日本映画年鑑 大正十三・四年』、21～22頁。
- 5² 『映画教育』大阪毎日新聞社、1931年7月号、38頁。

-
- ⁵³ 前掲書、『朝鮮総督府キネマ』、32～33頁。
- ⁵⁴ 上内彦策「総督府キネマ状況」『朝鮮』朝鮮総督府、1930年1月1日号、197頁。
- ⁵⁵ 津村勇「文化映画の展望」『朝鮮』朝鮮総督府、1938年2月1日、273号、149頁。